マーク・トウェインの天国建設の旅

朝　日　由紀子

マーク・トウェインの文学の出発点は、聖地への巡礼の旅を記した *The Innocents Abroad or The New Pilgrims Progress*（1869年）であったが、最後に出版した作品は、*Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven* と題する天国への旅行記であった。それは、マーク・トウェインが没する６ヶ月前の1909年10月に、「ハーパー&ブラザーズ」社からクリスマスの贈答用の本として出版された。聖地への旅行記は、マーク・トウェイン自身、敬虔なキリスト教徒たちの一団に加わって、ともにアメリカから地中海沿岸の諸国を回って、聖地への旅を経験し、それを作品にしたものである。一方、天国への旅行記は、ストームフィールド船長を語り手として構想した、マーク・トウェインの想像力が自由に飛翔した作品である。

キリスト教の歴史のなかで、天国に対する人々の憧憬は基本的に変わらなかったとしても、天国観には時代思潮の変遷による変化が見られた。本論では、マーク・トウェインが文学人生の集大成のごとくその文学的特質を発揮し、ユーモアあふれる表現で読者を大いに楽しませながら、19世紀の半ば以降、人気を博した「天国」物語のジャンルに挑戦し、特有の天国像を独創的に展開した *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven* を検討していく。

マーク・トウェインは、『自伝』の56章で、*Extract from Captain*

Stormfield's Visit to Heaven の創作の契機となったウェイクマン船長というきわめて興味深い人物について回想している。トウェインが最初、エドガー・ウェイクマン船長に出会ったのは、サンドウイッチ諸島への旅から戻り、サンフランシスコ『アルタ・カルフォルニア』紙に寄稿していた時期であった。1866年12月、サンフランシスコからニカラグア経由でニューヨークに向かうため、トウェインは『アメリカ』号に乗船した。船は、ゴールデン・ゲートの先で暴風雨に遭い、大惨事になるところをウェイクマン船長の見事な航行術により切り抜ける。そのときの船長に感銘を受けたトウェインは、さらにその人物を知るようになっていく。2度目に会ったのは、1868年パナマ・シティに滞在中のことであった。『自伝』では、その魅力的な人柄と合わせて、船長が「聖書を暗記していて、心底から信心深かった。下甲板で当直の時はいつも聖書を研究し勉強していて、絶えず新しいこと、これまでにないこと、予期せぬ喜びや驚きを見出し――その発見について話し、無知な連中に説明するのが好きだった。自分は聖書の中の奇跡の秘密を真に知っている地球上唯一の人間であると思いこんでいた」ことを語る。そして、2度目に会ったとき、船長はその素晴らしい想像力から生み出した、「天国を訪れた時の話」をトウェインにする。その話に刺激され、マーク・トウェインは、「ストームフィールド船長の天国訪問記」という題の短編を書くが、そのままになり、それから5，6年経て、最良の文学助言者であるウィリアム・ディーン・ハウエルズにその原稿を見せ、本にすることを勧められる。しかし、マーク・トウェインが実際にその作品を発表するのは、30年以上経ってのことであった。

その作品に関連して興味深いのは、『自伝』で言及されている *The Gates Ajar*（1868）である。その作品は、Elizabeth Stuart Phelps（1844－1911）という24歳の若い女性によって書かれ、たちまちベストセラーとなり、その後57版まで版を重ねた。さらに、イタリア語、フランス語、ドイ

ツ語などに翻訳され、国際的な成功も収めた。心の慰めを与える小説として、19世紀で最も読者の支持を得たこの作品で、Phelps は、文学的地位を確立したといえよう。

今日の読者が、「心を慰める文学」への当時の人々の強い関心を理解するうえで、時代背景としてのアメリカの歴史と時代精神の変遷の両面について知らなければならないであろう。実際に、*The Gates Ajar* は、南北戦争で愛する人々を喪い、心の慰めを見出すことができず苦しんでいる女性たちに向けて書かれたといわれる。それは、著者の Phelps 自身の体験でもあった。南北戦争は、アメリカ歴史上、最大の死傷者を数える悲惨な戦争であり、手や脚の切断手術がなされた負傷者は 3 万人を数え、さらに、死者の多くは行方不明のままとなり、数千人は無名の死者として埋葬された。父や兄、夫や恋人を戦争によって奪われた数多くの女性たちは、傷心を癒すすべを希求していたといえよう。そのような心情を映す人物として、*The Gates Ajar* においてはメアリーという主人公が設定されている。この作品は、日記形式の構成をとり、メアリーは日記の書き手である。読者は、日記の記述を通して、メアリーの兄ロイの戦死を知り、牧師の夫を亡くしてメアリーの家にやってきた叔母ウィニフレッド・フォーサイスの説く天国観に教化されていくメアリーの心の軌跡を辿っていく。

The Gates Ajar の最大のテーマは、プロテスタント正統主義の天国観とそれと異なるウィニフレッドに代弁される Phelps の天国観との対比にある。メアリーは、ロイが天国に行ったと信じながらも、地上での永久の別れとなったロイとの関係について苦しみ、カルヴァン派の牧師ブランド博士に救いを求めようとして得られない。ブランド博士は、天国とは、永遠、神聖、幸福を意味するところであり、天国でなすべきことは、神の本性を研究し、また神を賛美することである、という説教をする。メアリーには、それは一般論にすぎず、何かよそよそしく冷たいと感じられる。メ

アリーは、天国で人はなによりも神をまず喜んで賛美するであろうと信じるが、「竪琴を弾き、お祈りをすること」以外の方法はないのだろうかとその説教に疑問をもつ。ブランド博士のほかにもクワーク執事もまた同様に、天国とは、神への賛美を永遠に歌い続けるところと説く。このように、Phelps は、19世紀半ばまで信じられていた正統的な神中心の天国観を、ブランド博士やクワーク執事に語らせているといえよう。

キリスト教の歴史において天国がどのようなイメージで捉えられてきたかを確認しておくと、大別して「天の都、新しいエルサレム」と「楽園、エデンの園」であろう。両者ともに、壁や門で閉ざされたイメージといえる。その意味で、どのようにして天国への道を辿り、そして門に入ることを許されるかが、人々にとって深刻な問題であった。創世記の 3 章23－24節に、主なる神はアダムをエデンの園から追放し、「命の木に至る道を守るため」、番人のケルビムときらめく剣の炎を置かれたとある。罪と救いをめぐる神学は、キリストの死と復活による贖罪を通じて天国の門は信徒に開かれたとする解釈により、人々を信仰へと導いてきたのである。また、天の都に向けて人生の旅路を歩む者を天国への旅の巡礼者と捉える見方は、文学的想像力を喚起するテーマとなった。そして、宗教改革者は、その上でキリストと神の恩寵と慈悲とにとりわけ強調点を置いた。そこから生ずる神の支配する天国という神中心の天国観は、19世紀ロマンティシズムの時代までプロテスタントの正統的な考え方であった。

こうした神中心の天国観は、19世紀半ばから文学世界で大きく転回していく。「天国での家族との再会」というテーマは、初期ローマ・キリスト教の時代にさかのぼることができ、決定的に人間中心の天国を描き出した作品が、前述の *The Gates Ajar* である。ウィニフレッドは、ブランド博士の天国についての説教を聞いた後、それはブランドの考えであり、神の天国ではないとメアリーに断言する。ブランド博士もクアーク執事も言及

する「竪琴や合唱、玉座、白い衣」は「黙示録」に記されているが、「ヨハネ黙示録」が表しているのは、「ひとつのヴィジョンであり、ひとつの象徴である」と、ウィニフレッドはいう。聖書を研究して得たウィニフレッド自身の象徴的解釈は、地上生活が天国でそのまま継続していくというものである。メアリーはロイとこの世で会話をかわしていたように、天国でもまったく同様にロイと話すことになると叔母から教えられ、メアリーは慰めを与えられ、感動する。叔母が、天国の生活では「話をするだけではなく、笑いもするし、冗談をいったりもする」と続けて言ったことに対し、メアリーは、「天国で笑い声を立てたり、冗談を言う」のはひどく不道徳であり、不敬であるとカルヴァン主義的な考えを思わず口にするが、「神が天国で笑うのをお許しになる」とは、まったくそれまで思ってもみなかったことであった。

天国での生活が人間的な喜びに満ちたものであると思えてきたメアリーは、さらに、ロイがリンカーン大統領に会っている場面を思い浮かべ、叔母にそのことを伝えると、叔母はためらいなく同感する。

ウィニフレッドは、いずれ天国の門を入り家族と再会し、夫と娘フェイスとの家庭生活をそのまま天国でも送ることになると確信している。それは、具体的に、天国に「わたしの美しい家があるし、私の夫と娘もいると思う。」と語るなかに表現されている。作品の終章で、ウィニフレッドは、すでに手術不可能なまで進行した乳がんに冒されていることが判明するが、メアリーがこれまでの確信に揺るぎはないか尋ねる箇所は印象深い。そこでウィニフレッドは、「神様は、はっきりと門を開いてはおられない」けれど、「はっきりと閉じてもおられない。門は少し開いたままになっている」、と最後のヴィジョンを語る。この「門は少し開いている」という言葉がこの作品の題名になっている。

「心を慰める文学」の代表作とされる *The Gates Ajar* の特質を考察してきたが、それを踏まえ、つぎにマーク・トウェインの天国への旅の特質を検討していきたい。

マーク・トウェイン文学の最大の特徴は、「語り」の口語体であるが、*Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven* も、ストームフィールド船長は開口一番、「さて、わしが死んで30年ほど経ったとき、いささか心配になり始めた。」と語る。語る相手は、始終名前が登場する「ピーターズ」という友達であることはわかるが、これもマーク・トウェインの特徴である、聞き手は黒子に徹するので、ストームフィールド船長の語りに終始する。

来世を目指して宇宙空間を突き進んでいる船長の語りによる、きわめて独創的なこの作品において、マーク・トウェインの創作意図は何であったのか、興味を引く点である。トウェインみずから、『自伝』のなかで *The Gates Ajar* の「バーレスク」を構想していたことを表明している。というのは、Phelps の天国は、アメリカ最小の州である「ロードアイランド州ほどの広さの、みすぼらしい、ちっぽけな安っぽい天国――過去19の世紀の間に死んだ何十億というキリスト教徒の１パーセントのさらに十分の一ぐらいを何とか収容できるだけの広さしかない天国」であった、と独自な解説を展開する。「バーレスク」という手法は、従来のマーク・トウェイン文学にもしばしば見られ、トウェインは、当時人気を博した文学ジャンルをいわば換骨奪胎する技法を得意とした。

マーク・トウェインは、そのような限られた収容力しかない天国を拡大する方針を取った点に独自の想像力を発揮した。すなわち、「正当かつ合理的に素晴らしい天国を建設し、そこのキリスト教徒の人口は現在墓地に入っている人の10パーセントまでに増やした。」また、「物語の最後の方に

なると、私の建設した天国は考えられないほど大規模にふくれあがって手に負えなくなったので、けちくさい百万マイルなどという寸法を雄大な地域に用いることは止めにして、光年単位だけで測ることにした。そればかりか百万光年を一続きとしてしまった。」と語る。ここで注目すべきは、マーク・トウェインが「天国を建設」するという表現をあえてしていることである。新世界のアメリカを目指して大海原を越えたピューリタンたちが、新しいエルサレムを丘の上に建設することを志したように、想像世界で、マーク・トウェインは、広大無辺な宇宙のなかに気宇壮大な天国を建設する事業に取り組んだ。

マーク・トウェインの作品では、天国の門にいたる前に、船長は宇宙を航行し、エンケ彗星およびハレー彗星と遭遇する。ハレー彗星の臨場感あふれる描写は圧巻である。マーク・トウェインの誕生年と没年に出現したハレー彗星は周知の事実であるが、この作品が出版される直前の1909年 9 月に発見されたハレー彗星は、1910年 4 月20日地球に大接近し、その際、尾に有毒のシアン化合物が含まれていることから、世界的にパニックを引き起こしたことが想起される。その意味で、この作品の時事性が注目される。ハレー彗星の船長と言葉を交わした後、語り手は、暗闇のなかを航行し、突如、暗闇から一転して、まばゆい太陽光線と美しい光景に出会う。ついに輝く宝石で作られた「門」と金の壁に到着する。そこで語り手が見出すのは、「門」を目指して空を黒々と染める何百万人もの人である。

「門」に人々の群れといっしょに近づいていき、船長の番になってそこの事務長とのやりとりが始まる。ストレンジャー同士の会話のずれがユーモアを生むマーク・トウェインのほかの作品と同様、この場面でも、事務長が船長の出身地を地図上特定するのに手間取り、いくら規模を大きくして申告しても、互いの理解が成立しない。船長は始めにサンフランシスコと申告するが、まったく分かってもらえない。アメリカ合衆国はおろか、

太陽系ですら、事務長にとってほんの小さなしみにしかすぎない。ようやく、船長の住んでいた惑星は、「いぼ」と呼ばれる所であることがわかり、事務手続きが済む。

マーク・トウェインは、さらに、天国の「門」に入るところで、船長と事務長の認識のずれを場面構成に用いる。キリスト教の歴史で、天国で必須と信じられてきた「竪琴、花輪、光輪、讃美歌集」を、船長は身につけていないことに注意を喚起しようとするが、事務長は、まったくそのようなものを聞いたことがないと答える。船長はそれが習慣であると信じているのに対し、事務長の返答は、天国は広大であり、無数にある天界の種々の習慣など知ることはできないというものであった。ここで、天国はひとつでないというまったく新しい考えが示される。それに伴い興味深い点は、人それぞれにふさわしい天国があるということである。その事実を知った船長は、自分に適した天国に向かうことになる。

願い通りに到着して、今度は「竪琴と賛美歌集、一組の翼と光輪」を与えられ、門に入ることを許される。最初に船長の目に入ったのが、以前、トゥーレアリー郡で知っていたパイユート族インディアンであった。船長に会えてとても喜ぶインディアンを見て、ようやく自分にふさわしい天国にいることを実感する。さまざまな人種の人々がいて、翼で飛ぶ練習をしているが、だれも成功しない。船長は、この天国には数多くのインディアン部族がいることに気付く。

船長は、ずいぶん前に亡くなったサム・バーネットに出会い、会話をかわす。天国での先輩となるサムから、天国の実態について聞く。人は、聖書の象徴表現や寓意を文字通りに受け取り、この天国に到着するとまっさきに要求するのが、光輪と竪琴であると聞かされる。それらは天国で必須用品ではないとサムはいい、また天国は、この上なく幸福ですばらしいところだが、既成の概念と異なり、休息とは程遠い、最も忙しい場所である

と忠告する。食事は地上と同じく、十分に食欲が満たされ、自分の職業を選択することができることも教えられる。生前、詩人の魂をもっていた靴屋であれば、天国では靴を作る必要はない。天国には苦痛も苦労もあり、幸福は比較の問題だとサムはいう。サムの語る天国での生活は、天使について形成してきた人々の固定概念を裏切るものであった。

船長がつぎに会い、親しくなるのが、サンディ・マックウィリアムズという名の老いた禿頭の天使である。マックウィリアムズという名は、マーク・トウェインの短編でおなじみの名前である。船長がサンディの年齢を尋ねると、72歳と答える。天国には27年間いるので、当然99歳になっていると船長は思うのだが、サンディは、天国に来た時の年齢そのまま変わらないという。天国ではみな若く溌剌として元気であると、ずっと思っていた船長は意外に思う。願えば若くなれるので、実際にサムは2週間だけ若くなってみたが、72年間の知識と経験をもっているのに若者となって、若者世代のなかにいるのに飽きて、元の年齢に戻ったという。天国では、人は自分の精神年齢にふさわしい肉体年齢を選ぶことができるのである。皆が同一年齢で、外見や趣味や好みや感情が同じ人間から成り立っている社会が、どれほど退屈で単調なものか考えてみてくれと、サンディはいう。天国において自由に年齢が選択できるなかで、人生経験を重ねる意味を学んだサンディに、晩年を迎えていたマーク・トウェインの心情が投影していると思われる。

作品の後半でもっぱら翼が問題となっているが、それは天使論と関わっているといえよう。翼で飛ぶ練習を船長はいくらしても、船の操縦のようには上手にいかない。そこで、サンディや多くの者が翼をもっていないのに気付いて、サンディにそのことをたずねる。サンディの説明によって、船長は天使の翼について抱いていた概念がまったく更新される。絵画ではいつも天使は翼をつけているので間違えるのだが、翼は制服にすぎないと

サンディは明解に説く。使者としての使命を果たすとき、天使は必ず翼をつける。それは、手紙を配達する郵便集配人やパトロールをする警官は、平服ではなく、制服を着用するのと同じである。しかし、翼では飛行しない。つまり、翼は注目させるためだけのものであって、実用のためではない。天使自身は、天国で最も重要な人物であり、皆の敬服の念に満ちた視線を惹きつけているとたえず想像している、とサンディは天使論を語る。

天使は、重要な務めとして、死に瀕している子どもたちや善良な人々の幻のなかに現れるために、毎日地球に行かなければならない。現れるときは翼をつける。それは天使が公務を行なっているからであり、また、臨終の人には翼がなければ天使であることがわからないからである。天使がものすごい距離を不恰好な翼で飛行している、と地上の人間が考えるのは、ばかげている、とサンディは語る。天使は、語源的に「使者」であり、聖書において使者の務めを果たし、「主の御使い」という言葉がよく使われるので、サンディの語る天使の使者としての務めについては、聖書と合致する。ただし、翼をつけた天使像は芸術表現に見られるもので、人間の想像力の産物といってよく、その点をついてマーク・トウェインは、翼を仕事着と等価とみなすユーモラスな視点に立っている。

天使について蘊蓄を傾けるサンディであるが、船長は、天国にいるほかの人物についても情報を得る。ジャージー・シティ（ニュージャージー州）から来た酒場の主人のことである。ニューヨークの「ムーディーとサンキーの集会」で改宗したが、渡し舟で家路についたとき衝突事故に遭い、溺死したという。ここで触れられているドワイト・ムーディー（1837－99）もイラ・サンキー（1840－1908）も、大衆伝道に力を入れた福音派伝道者であり、トウェインは、同時代のキリスト教大衆伝道についても関心をもっていたことがわかる。さらに「タルマージという名のブルックリンの牧師」と名指しされているのは、トーマス・ドウィット・タルマージ（1832－

1902）であるが、トウェインは、タルマージ牧師の教会信者に対する階級差別が表れた文章を読み、それに対して批判したことがあった。ここではサンディの話として、タルマージは、説教のなかで、天国に行ったらまっさきに「アブラハム、イサク、ヤコブ」のところに飛んでいき、キスをして、涙を流すといったことが紹介される。だが、毎日 6 万人もの人が天国に到着し、「アブラハム、イサク、ヤコブ」のもとに駆けつけるので、老人たちは、クタクタに疲れ、タルマージの申し出をお断りすることになると話す。聖書に登場する族長たちのほかに、アダムにも人気が集まるので、アダムに声をかけサインを欲しがる天国に着たばかりの新人の前に姿を現していたら、アダムは、それ以外のことをする時間がなくなっていたはずという。サンディによれば、天国では、「だれでも自分が好むことを見つけることができ」（74頁）、互いに干渉しない。「造物主は、天国を建設するにあたって、正しく、リベラルなご計画に基づいて建設された。」（74頁）というサンディの言葉は、そのままマーク・トウェインの建設したい天国像を表明するものと解釈できる。

サンディの口から、歓迎式典に参列するために姿を現す、ヨブ、ハム、エレミア、アベル、3 人の大天使たちの名が出てくるので、船長は興味をかき立てられる。さらに話が進むと、地上での地位が天国での地位に移行しないことがわかってくる。シェイクスピアは、テネシーから来た仕立屋のビリングスの後を歩かなければならない。エレミアとビリングスと釈迦が並んで歩き、ダニエルとアフガニスタンから来た馬医者のサッカと孔子が一緒に歩く。また、エゼキエル、マホメット、ゾロアスターとエジプトから来た刃物のとぎ屋が一緒に続き、その後をシェイクスピア、ホーマー、フランスの片田舎から来たマレーという名の靴屋が一緒に続くのである。これを聞いた船長は驚くが、サンディは、これが「天国の正義」（87頁）であるという。ビリングスは仕立ての合間に詩を書いていたが、村人たち

の嘲笑の的になっていた。そして、病を得て瀕死の状態にあったときでさえ、村人からひどい仕打ちを受け、亡くなってしまう。「地上での功績に従って、報いを受けるのではなくて、天国において正当な地位を得る」（87頁）ということが天国の正義なのである。

マーク・トウェインの「天国の正義」は、人種に対しても行なわれる。船長は、ほとんど白い天使に会わないが、英語を話さない１億人にものぼる銅色の天使に出会うので、それら天使のことをサンディに聞く。アメリカは、白人が足を踏み入れる前、10億年以上、インディアン部族やアステカ族たちによって占有されていた。コロンブスの発見以来アメリカにおける白人人口と死亡率の数字をあげ、リベラルにこのことを考えても、亡くなった白人全員が天国に来て散らばっても、「サハラ砂漠に10セントの箱の同種療法薬をまき散らし、再びそれらを見つけるようなものだ。」（103頁）とサンディは説明する。

天国のアメリカ地区にほかの地区から旅行に来た者が、旅行記を書く場合、アメリカの記述について割くのは約５行であり、その内容は「この荒野には無数の赤色の天使たちが散在しているが、ときたま奇妙な顔つきの病気に罹った天使がいる。」（104頁）というものである。旅行者は、「白人や黒人を、ハンセン氏病かなにかに罹って、脱色されたか黒くなっているインディアンだと思う」（104頁）、とサンディは解説する。それは、広大無辺な天国のなかでのアメリカおよび白人の地位の相対的失墜を意味するものといえよう。

天国のイギリス地区に話が及び、同様に、地上での王としての身分は天国では継承されないことが説明される。サンディのよく知っている「チャールズ２世は、イギリス地区の最も人気のある喜劇役者の一人であり、リチャード獅子心王は、プロボクシング場で、かなり好評を博しつつある」（110頁）という。「ヘンリー８世は、悲劇役者で、人を殺戮する場面では迫真の演

技を行ない、ヘンリー6世は、宗教書を載せる台を持っている」(111頁)といった、それぞれにふさわしい役割を、かつての王たちは天国で果たしている。

船長とサンディが見守るなか、天国が一体となって、ジャージー・シティの酒場の主人を歓迎する式典が盛大に執り行われる。光り輝く式場は、あらゆる所からやって来た人々でぎっしり埋め尽くされ、滅多に姿を現さないモーゼやエサウもそこに出席している。大成功のうちに幕を閉じることで、作品も閉じられる。

Phelps の個人の心情に価値をおく天国観と異なり、マーク・トウェインの天国は、無限ともいえる宇宙にあまた点在すると想定され、国家も人種も社会的地位もすべてその差異を取り払われる。「天国の正義」により、だれもが天国で「新規まき直し」の人生を始めることが可能なのである。アメリカの建国の理念が19世紀末から20世紀にかけて喪失していくことに、激しくペンで抗議したマーク・トウェインであったが、この作品で、人類の壮大な夢を「天国建設」に託したかのようである。

(本論で *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven.* から引用した箇所の後の数字は、引用頁であり、引用は拙訳による。)

参考文献

Armand, Barton Levi St. "Paradise Deferred: The Image of Heaven in the Work of Emily Dickinson and Elizabeth Stuart Phelps". *American Quarterly*, Vol. 29, No. 1, 1977, pp. 55-78.

Browne, Ray B. "Mark Twain and Captain Wakeman". *American Literature*, Vol. 33, No. 3, 1961, pp. 320-329.

Budd, Louis J. "Mark Twain on Joseph the Patriarch". *American Quarterly*, Vol. 16, No. 4, A Mark Twain Issue, 1964, pp. 577-586.

DeVoto, Bernard. *Letters from the Earth: Uncensored Writings by Mark Twain*. New York: Harper Perennial, 1991.

Douglas, Ann. "Heaven Our Home: Consolation Literature in the Northern United Sates, 1830-1880". *American Quarterly*, Vol. 26, No. 5, Special Issue: Death in America, 1974, pp. 496-515.

Kelly, Lori Duin. *The Life and Works of Elizabeth Stuart Phelps, Victorian Feminist Writer*. Troy, New York: The Whitston Publishing Company, 1983.

Kessler, Carol Farley. *Elizabeth Stuart Phelps*. Boston: Twayne Publishers, 1982.

Long, Lisa A. "'The Corporeity of Heaven' : Rehabilitating the Civil War Body in the Gates Ajar". *American Literature*, Vol. 69, No. 4, 1997, pp. 781-811.

Neider, Charles. *The Autobiography of Mark Twain*. New York: Harper Perennial, 1975.

——. *The Complete Short Stories of Mark Twain*. New York: Bantam Books, 1983.

Phelps, Elizabeth Stuart. *Three Spiritual Novels*. Urbana: U. of Illinois P., 2000.

——. *The Silent Partner*. Ridgewood, N.J. : The Gregg Press, 1967.

Twain, Mark. *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven*. Amherst: Prometheus Books, 2002.

アリスター・E・マクグラス『キリスト教の天国』キリスト新聞社（本多峰子訳）2006.

コリーン・マクダネル＆バーンハード・ラング『天国の歴史』（大熊昭信訳）大修館書店 1993.

ローズマリ・エレン・グィリー『図説　天使百科事典』（大出 健訳）原書房 2006.